
ロシア東部のルイナックにみるエスノランド スケープ – 中国的なるものの進化 –

堀江 典生

1. はじめに

人々が定期的もしくは毎日商品を持ち寄って売買する空間を市（いち）もしくは市場（いちば）というが、この言葉は、原初的な物々交換の場から発展し、人々が多様な商品を求めて人が集まり、多様な商人・商店が集まる空間を指す。そうした空間をロシアではルイナックと呼ぶ。ロシア語のルイナックも、日本語や英語と同様に、商品交換の地理的空間（マーケットプレイス）を表す市場（いちば）と商品交換経済を表す市場（しじょう）の意味をもつ。他にも東洋的で原初的な物物交換の場を連想させるバザール（базар）や蚤の市に相当するバラホルカ（барахолка）や定期市に相当するヤルマルカ（ярмарка）などもマーケットプレイスを表現する言葉としてしばしば利用される。漢字では市場の漢読みと訓読みの区別が付かないため、本章では、ロシアの商品交換の地理的空間をマーケットプレイスの意味でルイナックと表記することにしよう。

ロシアのルイナックは、多くの場合、反閉鎖空間である。ルイナックには、境界があり、フェンスやゲートなどといった遮蔽物や建築物によって境界づけられている。境界づけられた空間は、ルイナックの商業の担い手たち（ルイナックの管理者、卸売業者、小売業者、労働者）が集まり、そこに購買者が商品を求めて集まることで、社会的空間として生産される。本章で着目するルイナックは、ロシア東部地域で「中国人ルイナック」と呼ばれるルイナックである。ロシア欧州部においては、中央アジアやコーカサス諸国、アルメニアなどからの商業の担い手が集まるエスニックなルイナックが多くある。そうしたルイナックの周辺で

は、後述するように、突発的な反移民感情の爆発が生じ、これまでも多くの暴動が発生している。そうしたルイナツクの周辺で生じる民族間対立と反移民感情の発露は、これらルイナツクが移民たちを担い手とするルイナツクのエスニックな性格に起因すると見られる。そのため、近年、露店営業や衛生設備を完備していない商業施設を解体し、エスニックなルイナツクを市内から放逐しようとする動きがある。一方、ロシア東部で「中国人ルイナツク」と呼ばれるルイナツクにおいて、中国人を対象とした反移民感情の発露に伴う事件は近年聞かれない。ロシア東部においても露店やコンテナなど衛生設備を整えていない簡易店舗を中心としたルイナツクの解体が進んでいるが、そこで働く移民たちを放逐することなく、形を変えてルイナツクが運営されている場合が多いことに気づく。「中国人ルイナツク」は、いかに地域住民に受け入れられ、いかに変容してきたのか、それを探ることは、ロシア東部地域の住民たちの「中国的なるもの (Chineseness)」との向き合い方や移民たちとの向き合い方を再考する格好の事例研究となる。

本章で観察対象とした中国人ルイナツクは、イルクーツクとノヴォシビルスクにあるルイナツクである。中国人ルイナツクは、特にロシア東部の諸都市には 1990 年代に必ずと言ってよいほど形成された。消費市場の空白を埋めるべく、中国からの担ぎ屋貿易がロシア東部の中国人ルイナツクの発展に貢献した。そうした中国人ルイナツクは、中国人商人によって中国製品が中国人的なやり方で販売されているルイナツクであると地域の人々の目に映った [Григоричев и Дятлов 2017]。中国人ルイナツクは、中露間の物流が発展し、組織化された物流が担ぎ屋貿易に取って代わった後も、独自の進化を遂げてきた。そして、そのランドスケープは、中国人に代表される「彼ら」のものではなく、地域住民にとっての「自分たち」の空間の一部に変容していった。反移民感情が発露しやすいロシアにおいて、中国人ルイナツクはエスニックなルイナツクでありながら、地域住民に受け入れられ、独自のランドスケープを形成していった。ロシア東部地域の中国人ルイナツクが、こうして独自に

進化してきたのは、ルイナックに対する地域住民の向き合い方がロシア欧州部のルイナックに対する地域住民の向き合い方と大きく異なるからではないか、そうした疑問から、本章の調査は始まっている。

本章は、もともと堀江 [2015] およびХорие и Константин [2015] においてイルクーツクの中国人ルイナックを考察した論文の一部をもとに加筆修正し、さらに新たにノヴォシビルスクを考察対象と加えることで、ロシア東部地域における中国人ルイナックの進化とそれに対する地域住民の向き合い方を考察している。本章で採用した研究の方法論は、複合的な質的調査である。フィールドワークによる研究対象の観察は、現場での市民へのインタビュー、画像、現場を運営する企業の提示する情報、マスメディアが提供する現場の情報、現場に関わる事件の報道などを分析対象としている。フィールドワークにおいては、地域住民と必ず帯同し、研究対象に対する専門的知識ではなく、日常のルイナックに対する認識や記憶を頼りに説明を求めながら、観察している。次節では、まずイルクーツク市の中国人ルイナックを、第三節でノヴォシビルスク市の中国人ルイナックをランドスケープとして描き、これらの中国人ルイナックの観察からロシア東部地域の中国人ルイナックが、地域住民にどのように位置づけられ、受け入れられ、発展しているかを明らかにする。

2. イルクーツクの中国人ルイナック

イルクーツク市内中心部に中国人の担ぎ屋貿易商が集まり、中国人ルイナックを形成したのは、ソ連崩壊後間もない 1993 年だと言われている [Дятлов и Кузнецов 2005: 168]。当時の中国人の担ぎ屋貿易商は、主に中露間の陸上国境を通じてロシアに入国し、需要を求めてシベリアにまで足を運んでいたと見られる。イルクーツク市は、歴史的にシベリアとロシア極東、そしてモンゴル、中央アジアとの交通の要所と言われている。シベリア鉄道の要所であることと、ノヴォシビルスクとチタに向かうトランス・シベリア高速道路があるため、中央アジアと中国両方の陸上国境物流がここで結節するという地理的条件が、中国人担ぎ屋貿易商を招

き、中国人ルイナックが形成された理由であると考えられる。

ソ連時代、1969年の中露国境ダマンスキー島での中ソ武力衝突以降、中ソ国境貿易は禁止されていたが、再開されたのは1983年からである〔堀江 2010〕。ロシア側では、ソ連崩壊までは国家が一元的に国境貿易を管理していたが、国家による貿易の一元管理がなくなると急速に中ロ国境貿易はソ連時代よりも盛んとなり、特に、中国人担ぎ屋貿易商たちによる中国製品のロシアへの持ち込みが盛んになった。2005年まで中露国境の持ち込み荷物は50キロまで非課税であったことが、担ぎ屋貿易を盛んにした理由である。1992年に中露間団体観光のビザ相互免除協定が結ばれたうえ、1994年まで中露陸上国境には入国管理が十分に行われていなかったため、ロシアにおける中国からの担ぎ屋貿易商の出現は、入国管理からも外れた訪問者を含んでいたとも考えられる。1990年代初期は、ロシア極東地域の不法移民数は40万人から200万人と様々な推計がなされていたが、その大多数が中国人であるとみなされていた〔堀江 2010〕。中ソ対立のなか、ロシア東部地域の住民たちが中国人に遭遇することはなかったため、イルクーツク市の中心部に中国人が出現したことは、「予期せぬ事態であり、まさに大きなショック」〔ディアトロフ 2010〕であった。また、急激な市場経済化のなか、国内生産と物流が滞り、物不足と貧困にあえぐ地域において、中国からもたらされた廉価な日用品は、地域住民の生活を支えた。

このイルクーツク市中心部に出現した中国人ルイナックは「上海(シャanghaiもしくはシャンハイ)」と呼ばれた。写真1で見てわかるように、なにもない空き地(フェルト靴工場跡地)に中国人担ぎ屋貿易商が集まり、中国から持ち込んだ商品を並べ露店営業を行ったのが、ルイナックの始まりである¹⁾。その中国人ルイナックは、当初、5千平方メートルほどの敷地(いわば、日本の小さな小学校の校庭程度の広さ)から始まっ

1) この写真を所有するイルクーツク国立大学のディアトロフ教授によれば、この写真がいつ撮影され、誰が撮影されたかは、残念ながら確認できないとのことだった。

た。最盛期にはその2倍の面積（約1万平方メートル）になっていたという [Дятлов и Кузнецов 2005]。ただ、地域住民の感覚から言えば、中国人ルイナックはより広大な領域を中国人ルイナックとして認識していたようである。ここではГригоричев и Дятлов [2017] に倣って、それを中国人ルイナック「上海」と区別して、「大上海」と名付けよう。グーグルの地図上で「大上海」の特定を行う作業を行った結果が、図1である。もともとの中国人ルイナック「上海」は現在のショッピングモール「シャンハイ・シティ」一帯にあった。いくつかのルイナックや周辺地域を飲み込んだ事実上のルイナックの領域である「大上海」は、ミチリャゼヴァ通から「文化と憩いの中央公園」に挟まれた非常に広大な領域を指す。グーグルマップ上の計測では、278,000m²ほどの面積を示していた。



写真1) 初期のイルクーツク市の中国人ルイナック (В. Дятлов提供)



図1) 中国人ルイナック「上海」(濃い灰色)と「大上海」(薄い灰色)
グーグルマップで筆者作成

2003年までの中国人ルイナックは、製品とルイナックで働く商人の属性の両面で「中国人」の性格の強いものであった。私がフィールドワークを行った際に、地域住民が昔このあたりに中国人がたくさん住んでいたと指摘してくれたように、最盛期にはルイナック周辺には中国人の集住地区も存在していた。ルイナックでは中国語新聞が発行され、中国人社会団体も形成され集团的行動をとるなど、社会的実践を伴う中国人ディアスポラの形成が予感されていた〔Дятлов 2005: 104〕。

2002年、消防当局により店舗数がルイナックの許容量を超えていることを理由に一定期間ルイナックが閉鎖された。Дятлов и Кузнецов〔2005〕によれば、2000年時点で2500店舗がひしめいていたルイナックは、2003年の再開時には1300店舗にまで減少した。店舗の多くは、コンテナなどによって作られた簡素な店舗であった。2002年時点では、3千人以上の中国人・朝鮮人（中国系朝鮮人）、約300人のベトナム人、約150人のカザフ人、600人弱ほどのロシア人、200人ほどのその他の民族の人たちが働いていたという。2003年のルイナックの縮小に伴い、ルイナックには495人の中国人と485人のロシア人が残ったという〔Дятлов и Кузнецов, 2005: 181〕。2007年の外国人地位法改正により小売業店頭で外国人が労働できなくなったのは、2007年以降である。そうした法律の縛りのなかった時期に、中国人ルイナックは、中国人就労者が圧倒的多数であったルイナックから徐々に中国人とロシア人が同じぐらいの比率で働くルイナックに変貌していることは興味深い。

市当局は、2004年にルイナック閉鎖の方針を表明する。そして、最終的に中国人ルイナック「上海」が完全に消滅したのは、2014年になってからである。中国人ルイナックの閉鎖は、方針決定から10年も時間を要したことになる。私がこの中国人ルイナックでのフィールドワークを実施したのは、中国人ルイナックが完全に閉鎖されて間もない2014年12月だった。2003年以降のルイナックの縮小、2004年のルイナック廃止方針、そして、度重なる規制により、ルイナックから

中国人も去り、かつての中国人集住地区は借り手・買い手のいない寂れた区画となっていた（写真 2）。かつての中国人レイナック「上海」の敷地の一部には、2011 年から開業した「シャンハイ・シティ」というショッピングモールが建っている（写真 3）。ショッピングモール「シャンハイ・シティ」と通りを挟んだ向かい側には「パヴロ・チェトコフ広場」という複合商業施設がある。私が訪れた時点では、その商業施設の隣では以前からの中国人レイナックがまだわずかに残って営業していた（写真 4）。



写真 2) 売り出される中国人居住家屋



写真 3) ショッピングモール「シャンハイ・シティ」



写真4) 営業を続けていた中国人ルイナック

なぜ、このルイナックは行政によって閉鎖に追い込まれたのであろうか。このルイナックのステークホルダーの様々な利害が交錯し、衝突を生む源泉にもなっていた。中国人ルイナック「大上海」は、イルクーツク州のなかでも最も大きな中国人ルイナックであり、それは「闇経済」を形成し、巨大な利益を生みだしていた。中国人ルイナック「上海」は、設立当初から市の管理地（旧ソ連時代の工場跡地）にあった。報道では、「犯罪ゲッター」と揶揄されており、その管理地での商業活動は闇経済そのものであった。市当局の説明では、中国人ルイナック「上海」の露店主は、閉鎖時点まで勝手に土地を占有し、許認可を受けずに営業を行っていたという²⁾。2002年になってようやく「イルクーツク市キーロフ地区市営商業所有複合体の管理に関する市行政機関³⁾」といういかにも回りくどい公設名がつけられた。それゆえ、中国人ルイナックは、公設市場としての性格ももっていたが、その管理はピーク時まで曖昧だったことになる。管理面で曖昧さもちながらも、市当局は中国人商人にテナントを貸与し、市当局はこのルイナックの運営によって収入を得ていた。事前支払で一ヶ月の貸借

2) <http://www.vsp.ru/2014/05/06/shanhajka-davaj-do-svidaniya/> [2019年7月9日取得]

3) ロシア語では、Муниципальное учреждение по управлению муниципальными торговыми имущественными комплексами Кировского района города Иркутскаと表記される。

の場合、露店一日当たり 80 ルーブル、一日貸しで 100 ルーブル、コンテナ営業の場合は 240 ルーブルの賃料で、イルクーツク市の賃料収入は 2004 年に 8 千万ルーブルあったとされ、一日あたり、1 万人から 3 万人の買い物客が訪れたこのルイナックからの税収だけで 4 千万ルーブルを得ていたとされる [Григоричев и Дятлов 2017: 123]。それゆえ、巨大な収益を生むルイナックは、政治闘争の場にもなった。ショッピングモール「シャンハイ・シティ」と隣接するショッピングモール「パヴロ・チェトコフ広場」は、地元民間グループ企業「フォルトゥーナ」が管理運営している。このショッピングモールも、2014 年に突然市当局により一時的に閉鎖されている。このショッピングモールの企業創始者パヴロ・チェコトフは、その名前を冠した「パヴロ・チェトコフ広場」で銃撃され亡くなっている。パヴロ・チェトコフ亡き後に企業代表者となったのが、その妻であるニーナ・チェトコヴァである。チェトコヴァは、地元名士であり、2011 年までロシア自由民主党党员、その後政権与党の統一ロシアの党员となり、イルクーツク州議員を務めている。同じ統一ロシア党员で、中国人ルイナック「上海」の閉鎖を推し進めたヴィクトル・コンドラショフ市長とはライバル関係にあったとされ、「フォルトゥーナ」が管理運営する中国人ルイナックの閉鎖は、イルクーツク市長選を睨んだ競合関係に起因すると勘ぐる報道もあった⁴⁾。

さらに、中国人ルイナックが移民をルイナックの担い手とした底辺消費市場としてのネガティブなイメージを持ち、それがイルクーツク市の中心部にある歴史景観地区に隣接しているという事実、市当局がルイナックの閉鎖を決定した理由を求めることができよう。拡張され大規模化した中国人ルイナック「大上海」は、中国人担ぎ屋貿易商で溢れ、衛生設備もなく、営業許可や徴税も不透明なまま、移民たちに占拠されていることで、地域住民の反発を受けていた [Григоричев и Дятлов 2017: 122]。

4) <http://babr24.com/irk/?IDE=130671> [2019年7月5日取得]

90年代初期、不足経済を引き継いだ地域消費市場において、特に、旧ソ連地域内での物流が寸断され、地域の消費財生産も滞り、必要とされる日常生活品が流通しなかったシベリアやロシア極東地域において、旧ソ連時代には国境を閉ざしていた中国からの消費財供給は、旧ソ連時代の消費財供給を代替するものであった。市場経済化が進展するにつれて、また、地域住民の所得が上昇するにつれて、地域の消費市場は中国から流入する消費財ばかりで構成されるのではなく、多様な流通経路をもつ製品で満たされるようになった。それはただ多様になったというだけでなく、多層的な消費市場になったといえる。一般的に中国人ルイナックで販売される製品は、安価であるが質が悪いとされている。そうした中国人ルイナックは、地域住民の購買における選択肢の一つを提供しており、同時に、所得格差が拡大するロシアにおいて低所得者層の需要を取り込んでいる。その意味で、中国人ルイナックの存在は、市民が求める選択肢の一つである一方で、無秩序で、非衛生的で、中国人移民が集住する底辺消費市場としてネガティブなイメージを伴っていた。そうしたネガティブなイメージをもつ底辺消費市場が歴史景観地区に賑わいをもっていることが、市当局によるルイナックの排除に帰結したと考えられる。ただし、地方政府によって闇経済が横行する空間としてのルイナックを市内中心部から排除することと、移民によって形成されているエスノランドスケープとしてのエスニックなルイナックを排除することは、このイルクーツクだけでなく、全国的に見られる動きである。

中国人ルイナック「上海」の代替ルイナックとして、中国人ルイナック「上海」跡地には、ショッピングモール「シャンハイ・シティ」が建設され、イルクーツク市郊外の広大な敷地に大がかりな複合商業施設「キタイ・ゴラド (Китай - город: チャイナ・タウンのこと)」が新たに建設された(写真5)。閉鎖された中国人ルイナック「大上海」の商人たちは、閉鎖後にこれらの新たな中国人ルイナックに移動したという。ショッピングモール「シャンハイ・シティ」も新たな郊外の複合商業施設も、地元グループ企業「フォルトゥーナ」が運営している。イルクーツク市が所有

する旧工場跡に自然発生的に中国人担ぎ屋貿易商が集まり、無秩序にレイナックが形成された従来の中国人レイナックと異なり、地元資本の企業によって統括され、衛生管理が行われ、屋根付きとなった新たなレイナックにおいて個々の中国人経営者がテナントを運営している。郊外にできた「キタイ・ゴラド」と「シャンハイ・シティ」との間は15分間隔で無料バスが運行され、郊外中国人レイナックへのアクセスの悪さに対して運営会社が対策を立てている。私が訪れた2014年時点では、3万平方メートルの広さだったレイナックは、2016年現在では7万平方メートルの広さにまで拡張されたという〔Григоричев и Дятлов 2017, 122〕。

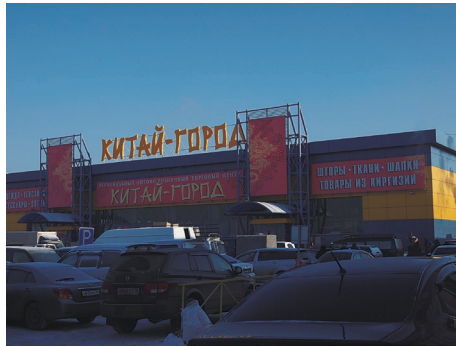


写真5) 中国人レイナック「キタイ・ゴラド」

興味深いのは、「無秩序」、「犯罪」、「中国人」、「移民」、「底辺消費市場」といったネガティブな中国人レイナックのイメージが市当局による中国人レイナックの排除に繋がったものの、新たに建設されたショッピングモールや郊外の商業複合施設では、「シャンハイ・シティ」や「キタイ・ゴラド」という名称に象徴されるように、「中国的なるもの」を継承している点である。中国人商人によって中国製品が中国人的なやり方で販売されているという初期の中国人レイナックがそのまま継承されているわけではない。ショッピングモール「シャンハイ・シティ」の開業時、イルクーツクの報道では、「近代的なショッピングセンターがイルクーツクの中国人レイナックに

オープンした」と伝えている [Григоричев и Дятлов 2017, 124]。地元グループ企業「フォーチュン」は、かつての中国人ルイナック跡や郊外にこれらの新たなルイナックを建設する際に、積極的に「中国人ルイナック」であることを提示した。「中国的なるもの」を象徴する「シャンハイ・シティ」や「キタイ・ゴード」といった名称の利用は、ルイナックを地域住民にとって忌避すべきランドスケープを象徴するものとしてではなく、彼らが求める廉価な商品を販売する地域の独自のランドスケープとして再生させた。このことは、中国人ルイナックが、中国人という特定の民族により生産された空間としてのエスノランドスケープではなくなっていることを表している。シベリアの都市住民にとって「中国的なるもの」は、いま国境を越えてやってくる廉価な商品に満ち、移民たちを含め世界に繋がるものとしてコード化され、中国人にのみ依らない新たなランドスケープとして、市民に提示されていると見ることができる [Григоричев и Дятлов 2017: 124; Хорие и Константин 2015: 158; Дятлов и Григоричев 2014: 17]。

新たなショッピングモール「シャンハイ・シティ」や郊外の「キタイ・ゴード」を見て回ると、中国製品が中国人ルイナックにおける主要な製品であることは、変わりがない。ただ、ロシア製品やベラルーシ製品も販売されており、このルイナックに見合った価格帯と品質の品揃えが行われていることが看取できる。これらの品揃えは、中露国境を通じた物流に依存した中国人商人の卸売機能だけ揃えることができるわけではないことは、容易に推察できる。つまり、中国製品だけに依らないより組織だった流通網のなかで運営されている。また、中国人ルイナックとはいえ、すでに店頭で働くのは中国人ばかりではない。かつての中国人ルイナックを知る者にとっては、中国人そのもののプレゼンスがルイナックのランドスケープのなかで極めて低くなっていることに気がつく。逆に目立ったのは、中央アジア出身者やロシア人の売り子の姿である。2007年以降、外国人が小売店頭で働くことが許されなくなったことは、中国人のロシアで

の小売りのあり方を大きく変えた⁵⁾。

中国人ルイナック「上海」の時代との大きな違いは、当時、シベリアや極東地域住民にとって中国人ルイナックが、旧ソ連崩壊後に現れた外国人が目立った形で地域に出現した最初の場所であったが、現在のシベリア・極東住民にとって中国人の存在は地域の基礎条件になっている点である。そこに、中国から中央アジアを經由した物流網が加わり、中国人ルイナックは中国製品を中心とした多民族的ルイナック空間となっている。ロシアン・カフェや中華料理店だけでなく、ウズベク・カフェ、タジク・カフェ、クルグズ・カフェなど、中央アジアそれぞれの民族カフェが見受けられ、ハラル食材店もある。多文化的・多民族的ルイナックとしての中国人ルイナックは、中国人や中国を代表するエスノランドスケープではなく、独自のマルチ・エスノランドスケープを形成したと言える。

注目すべきは、中国人ルイナックの表象および担い手としての労働力、そして、そこで販売される中国製品に多様性と差別化をもたらしているのは、クルグズ商人・物流の中国人ルイナックへの関わりである。イルクーツク市の中国人ルイナックでは、クルグズスタンの表象が目立っている。ビシケクという名を冠したショッピングセンター（写真6）が、廃止された中国人ルイナック「上海」に隣接してある。また、クルグズスタン・カフェなど、そこで働くクルグズ人も通う食堂もある。新たな中国人ルイナック「キタイ・ゴラド」にも「ビシケク市場（Бишкекские ряды）」という衣料品店がある。ロシア東部地域においては、1990年代から中露国境を通じた物流に商品を依存し、それゆえ、中国北東地域で生産されたもの、もしくはその地域を迂回して流入した製品がロシア極東で売られてきた。ウラン・ウデあたり

5) このことは、イルクーツクに限った中国人ビジネスの対応ではない。例えば、中露国境地域のアムール州ブラゴヴェシチェンスク市では、事実上、有限会社や個人経営の形態をもつ中国人企業であっても、ロシア国民の名義で企業は登録され、かつてと同じ商売をしているが、それでも実質的に中国人経営と思われるものがブラゴヴェシチェンスク中心部において300-350店舗見られるという。ただし、売り子などとして仕事をしている外国人は50人ほどしかいないという [Бляхер и др. 2013: 169-170]。中国人商人は、店舗所有者であり、地元住民の雇用者でもある。

からのシベリア地域においては、中国東北地域からの物流だけでなく、中央アジア経由の物流が消費市場に絡んでいる。中央アジアのなかでも、クルグズスタン商人は、クルグズスタンと中国との物流を生かし、それをロシアに持ち込む流れを構築しているようである。地元住民の評価では、中国人ルイナックにおいて同じ中国製品でも中国人が売る商品よりもクルグズ人が売る商品の方が質が高いというイメージがある。それゆえ、私たちが訪れたルイナックの店頭に、「クルグズ人販売員求む」(写真7)との求人広告が張り出されていた。価格の安さと質の悪さだけが誇張される中国人ルイナックにおいて、物流経路およびその経路を取り扱う民族により中国製品の質の階層が生まれ、地域住民の購買選択肢のひとつとなっているところは興味深い。



写真6) ショッピングセンター「ビシケク」



写真7) 「クルグズ人販売員求む」

クルグズスタンからの商人は、ビザなしでロシアに入国することができる。クルグズスタンからの労働者は、タジキスタンやウズベキスタンからの労働者が取得しなければならない労働パテント（旧ソ連地域のビザ免除国からの労働者が取得する労働許可）も、ユーラシア経済連合に加盟していることから、不要である。テナントで働く従業員にとって、入国前に労働許可を取得しなければならない中国人労働者よりも遙かに入国や就労が容易である。私がルイナックを視察するなかで、クルグズ人を中心に多くの中央アジア諸国やコーカサス諸国など旧ソ連からの労働者やベトナムなどアジアからの労働者が働き、彼らの存在がルイナック内部や周辺のエスニック・カフェを維持させている⁶⁾。もちろん、巨大なルイナックは、地域住民の雇用の場でもある。ルイナックという空間が多様な民族的背景をもつ担い手の交差点となり、中国製品を中心とした商業活動が多民族的な性格を帯びている。多様な移民たちが持ち込む文化をルイナックは包摂している。

イルクーツク市のかつての中国人ルイナックの排除・解体とその後の新たな中国人ルイナックの展開は、ロシアで全国的に見られる移民たちを主な担い手としたルイナックの排除・解体の一例であることは確かである。ただ、形成期から中国人ルイナックとして発展してきた中国人に由来するエスノランドスケープは、2002年以降、反移民感情の標的となるはずの中国人の店頭におけるプレゼンスが低下し、地域住民も含む多様な民族的背景をもつルイナックの担い手が協働することにより、変貌を遂げていった。中国人ルイナックに残る「中国的なるもの」は、移民としての中国人を表すものではなく、市民の廉価な商品選択肢として国境を越えてやってくる商品を表し、ロシア外部の世界を指し示すものになっていった。それゆえ、ルイナックのエスノランドスケープは、地域住民が忌避すべき空間ではなく、それゆえ、旧中国人ルイナック「上海」

6) 私が観察できた範囲では、エスニック・カフェやレストランは、中国とクルグズスタンのものだけでなく、同じく移民労働として働くベトナム料理レストランなどがあった [2014年12月2日視察時点]。

が解体された後も、「中国的なるもの」を指し示す名称が新たなレイナックの象徴となったのである。その新たなランドスケープは、「中国的なるもの」の意匠を纏いながらも、クルグズ人を初め、多様な移民たちによって書き換えられ、特異なエスノランドスケープを形成し、地域住民に受け入れられながら発展している。

3. ノヴォシビルスクの中国人レイナック

シベリア最大の都市ノヴォシビルスク市のグシノブラツキー・レイナックは、1970年代からあったというが、全盛期は地域の人々が市場経済への移行期に伴う不況に苦しんだ1990年代であった。ウラル以東最大のレイナックと言われ、35万ヘクタールの面積（東京ドーム約7.5個分）をもっていた。ケメロヴォ州、トムスク州、アルタイ地方など周辺地域で職を失った人々が、このレイナックで仕事に携わり、旧ソ連時代に技術者、医師、設計士、教師だった者もいたというから、移行期の人々の生活の困難を支えた空間であったとも言える。グシノブラツキー・レイナックは、卸売市場であると同時に、小売市場でもあった。特に、中国からの輸入品がこのレイナックに流れてきていたため、中国人レイナックとみなされていた。グシノブラツキー・レイナックは、蚤の市（*барахолка*）と言われ、闇経済のはびこる空間として市当局からも問題視され、このレイナックの傍にある住宅地は、住むのには適さない場所と地域には見なされていた。モスクワのチェルキゾフスキー・レイナックにちなんで、「シベリアのチェルキゾン」とも呼ばれていた。

このレイナックという空間の闇経済は、通称「トルノフ一味（*банда Трунов*）」の管理下にあった。この犯罪グループの代表アレクサンドル・トルノフには、2013年に懲役22年の判決が言い渡され、地域から放逐された。トルノフは、1997年から2009年までの間、ノヴォシビルスク市の半分を管理下に置いていたと言われ、種々の犯罪に関わり、前ノヴォシビルスク副市長アレクサンドル・ソローキンやその

ほか市政府要人が共犯者として懲役刑を宣告されている⁷⁾。つまり、このレイナックは、犯罪グループに組織されていたと同時に、市政府関係者の汚職によって維持されていた空間であったと言える。2000年代初め、市当局がレイナックの再編を繰り返し行おうと試みたものの、2001年には前ノヴォシビルスク副市長イゴリ・ベリャコフが何者かに射殺され、2004年にはこのレイナックの再編を進めようとしていた別の同市副市長ヴァレリー・マリャソフが射殺されるなど、妨害行為が続いていた。前副市長ベリャコフは、グシノブラツキー・レイナックに関する改革の中心人物であったとされている⁸⁾。

ちなみに、レイナックの施設に関する規制は、すでに2007年1月10日公示の「小売市場とロシア連邦労働法典改正に関する」連邦法 No. 271 で規定されており、組織化された商業施設としての諸規制が第12条に詳しく規定されている。前節のイルクーツクの中国人レイナックに対して市当局が閉鎖の方針を示したのも、基本的にこの連邦法に基づく決定であったと考えられる。衛生設備の未整備などを理由にしたレイナックの閉鎖がロシア各地で実施され、露店に近い様相の店が駆逐され、再開発において箱物としての商業施設が建設された理由は、こうした規制にある。2007年は、アフリカ豚コレラがグルジアで確認され、ロシアに広がり始めた年であり、レイナックや露店の衛生に対する規制強化の発端である。ただし、それ以降も、ロシアでは露店で自家栽培の野菜を売ったり、古着を売ったりする光景を目にする。基本的に、個人企業家の登録がなければ、こうした露店での自家栽培野菜の販売や蚤の市を開くことはできない（ロシア連邦行政違反法典第14章）。2017年8月2日公示（2019年1月1日施行）の「ロシア連邦の特定立法行為に対する国民への支援と修正に関する」連邦法 No. 217により自家栽培物の露店販売について、より規制を強化するに至って

7) 2015年10月1日 付けRIA Novosti:<https://ria.ru/20151001/1294286005.html> (2018年11月5日所得) および2018年12月20日付Taiga.Info:<https://tayga.info/144228> (2019年5月28日所得)を参照。

8) 2005年10月26日付Taiga.info: <https://tayga.info/91625> (2019年5月29日所得)

いる。一連の規制の強化は、自家栽培物の無許可販売を規制しようとするものであると同時に、レイナックのような空間や公道における無秩序な販売を規制しようとするものであった。



写真 8) グシノブラック大通りの市電停留所付近の蚤の市

ある報道によると⁹⁾、ノヴォシビルスク市当局もグシノブラツキー・レイナックを 2014 年 1 月 1 日までに閉鎖する目標を立てていた。市当局の発表では、ピーク時には約 1 万人、2013 年 1 月 1 日時点で約 6 千人がこのレイナックで働いていた。2013 年末には 4 千人にまでこのレイナックの就労者は減少している。2013 年 12 月に、市当局はレイナックの閉鎖期限を 3 ヶ月延長すると発表したが、その後、何度か再延長された。2015 年初め、市当局はこのレイナックの営業の終了を 2015 年 6 月 1 日としたものの、閉鎖はこの年の 10 月 1 日まで延びた。この内容を報じた記事は、2015 年 10 月 1 日付けで、当時の最新の市当局の発表では、依然として 2630 店舗（コンテナ）が操業していた。市当局は、10 月 1 日以降は操業を止め、20 日以内に備品の撤去を行うように勧告した。10 月 1 日以降、購買者はレイナックに入場できないものとし、行政代執行と連邦移民庁が違法店舗の摘発を行うと市当局

9) 2015 年 10 月 1 日付け RIA Novosti: <https://ria.ru/20151001/1294286005.html> (2018 年 11 月 5 日所得) および News-NSK: <http://news-nsk.com/kudapereexala-baraxolka-v-novosibirske.html> (2019 年 5 月 29 日所得)

は宣言した。同時に、このレイナックがある地区の6つのショッピングセンターで、レイナックで操業していた店舗を受け入れることができる」と市当局は広報している。当時、これらのショッピングセンターは4492店舗区画のうち2380区画がまだ空いている状態であったからだ。また、別の地区の2つのショッピングセンターでも受入が行われている。閉鎖後のグシノブラツキー・レイナック跡は、地下鉄車両所、地下鉄駅、バスターミナルが建設される計画であるとされていた。逆に、そうした新たな建設計画を進めるために、レイナックを違法なものとしたとする報道もある¹⁰⁾。グシノブラツキー・レイナックで営業していた店舗は、近隣のショッピングセンターのテナントに入居し、営業を再開しているが、すべての店舗が営業を再開できたわけではない。これまでのレイナックに比べ高騰したテナント料を支払う見込みが持てない店舗もあり、また、近隣のショッピングセンターも許容数を越えた店舗の受入ができず、入居審査を厳しくしたためである¹¹⁾。

グシノブラツキー・レイナックが閉鎖されるまで、グシノブラツキー・レイナックは中国人レイナックと認識されていた。市民に尋ねると、レイナック閉鎖後、中国人商人たちは、ショッピングセンター「ドゥルージバ (Дружба)」やショッピングセンター「ヴォストーク (Восток)」に移っていったという。グシノブラツキー・レイナック跡地において私がフィールドワークを行ったのは、2018年12月である。このレイナックが閉鎖されて中国人商人たちが移っていったというショッピングセンター「ドゥルージバ」と「ヴォストーク」、および「ネフスキー」と「ラドゥガ (Радуга)」を閉鎖前のレイナックの様子を知る地元ロシア人男性とともに訪問した。

旧グシノブラツキー・レイナックは、すでに2016年に清算されている公開株式会社「グシノブラツコエ」のほか、複数の運営企業によつ

10) Деловой капитал: <https://nsk.dk.ru/wiki/gusinobrodskiy-veshchevoy-rynok> (2019年5月29日所得)

11) 2015年10月16日 付NGS-Novosti: <https://news.ngs.ru/articles/2283743/> (2019年5月29日所得)

て管理、運用されていた。住所は、ノヴォシビルスク市グシノブラーツコエ大通り 70 で、ノヴォシビルスク駅から直線距離で 8km 強西方の都市部と森林部の境界に近い場所にある。旧グシノブラツキー・ルイナックの境界を特定することは、フィールドワークにおいては難しかった。このルイナックは、もともと商業パビリオンや露店およびコンテナ群で形成されていたが、複数の運営企業によって形成された個別ルイナックの集合体であり、広大な土地にルイナックが広がっていたため、地域の人々にとってグシノブラーツコエ大通り沿い一帯がルイナックであるとの認識が強い。私がフィールドワークを行ったショッピングセンターも、グシノブラーツコエ大通りの両側に面しており、その中間地点あたりに旧公開株式会社「グシノブラツコエ」があった。旧公開株式会社「グシノブラツコエ」の住所一帯は、コンクリートの壁に囲まれていて、壁の内側のかつてのルイナックは撤去され、なくなっている。かつてのルイナックの様相を垣間見ることは、すでに閉鎖されたこのルイナックでは難しいが、大通りに面したお店に、わずかに昔のルイナックの面影を見ることができると、同行した地元市民は言う。

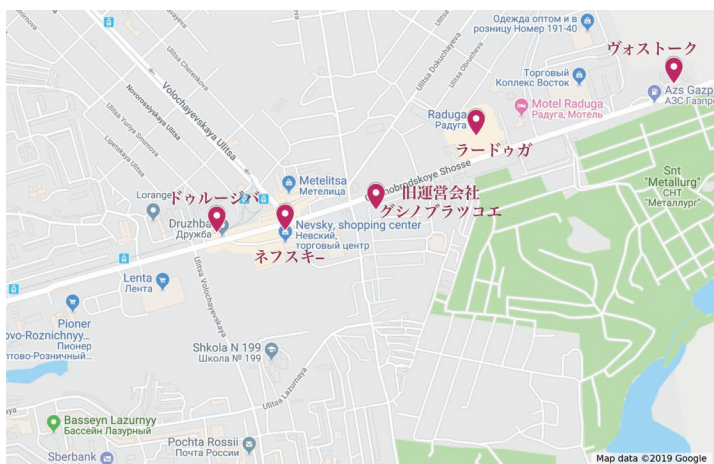


図 2) 旧グシノブラーツキー・ルイナック

ショッピングセンター「ヴォストーク」は、以前のレイナックでテナントを運営していた中国人商人たちがレイナックの閉鎖後に入居したショッピングセンターである。「ヴォストーク」のホームページには、「グシノブラーツキー衣料レイナックは、ショッピングセンター・ヴォストークの屋根の下で営業を続けています!」と書かれている。法律により露店が禁止され、屋根のもとで営業することになった経緯と、「ヴォストーク」が旧グシノブラーツキー・レイナックを継承したショッピングセンターであることを意識的に提示している。建物は、鉄骨を簡易なパネルで覆った巨大なパビリオンで、ロシア国旗の色をあしらった外観となっている(写真9)。ショッピングセンターの広報によると、5万平方メートルの広さをもち、800台の無料駐車場を備え、3千ものテナントをもち、ロシアの国産品のほか、中国、ベトナム、トルコ、イタリア、ポーランドなどからの輸入品も取り扱っており、一日当たり1万5千人以上の来客があるという。



写真9) ショッピングセンター「ヴォストーク」

内部は、小さなテナントが並び、かつての中国人レイナックの露店やコンテナ店が屋根付きの建物の中に整理されて運用されるようになったというように観察できる。取り扱っている商品も、中国製品が主力であり、また、各テナントに掲示されている賃借のライセンスを見ると、中国人らしき名前が目立つ。ここで店番をしている人々のなかに、

ロシア人以外にも東洋系とおぼしき人々が多いが、ロシア語対応をしているため、必ずしも中国人であるとは言い切れない。

このショッピングセンター「ヴォストーク」を裏手から出て、その境界沿いを歩くと、壁の向こう側に中国語で「超市（スーパーマーケット）」という看板に出会う。このスーパーには、中国食材を中心とした。ロシアにおいては、中国人ルイナックだけでなく、中央アジア諸国やコーカサス諸国からの移民達が担い手となっているロシア欧州部のルイナックでも、販売される商品は輸入品であっても、少数民族のディアスポラや新たな移民の需要を満たしたり、彼らの文化を色濃く繁栄した商品やサービスを提供したりするための商品を販売しているわけではなく、ロシアの消費者が日常生活において必要とするものを販売している。それゆえ、移民たちの文化を色濃く反映し、彼らの文化や作法の理解なしに利用できないような商品が販売されているわけではない。特に、グシノブラツキー・ルイナックは、衣料を中心としたルイナックであり、商品の文化的背景は重要ではない。ところが、この「超市」は、中国食材を扱い、販売員も中国人であり、ロシア語での対応をしていない。この地区で働く中国人たちを対象としていると考えられる。一般的に移民たちがエスニックなつながりを頼りとして集住する地区において、移民たちの生活やホスト社会に対応するための様々なサービスが提供されるが、ロシアの場合、移民ゲッターのような集住地区の形成が目立って存在しているわけではない。そのかわり、カフェや移民によるメディカルセンターや、移民たちと法的・行政的なサービスと仲介する業者などによって「移民のためのインフラ」〔Пешкова 2015〕が提供されているという。この「超市」も、中国人商人たちのロシア滞在中の重要な「移民のためのインフラ」のひとつであると考えられる。

ショッピングセンター「ヴォストーク」と同様に、グシノブラツキー・ルイナック閉鎖後に中国人商人たちが移動したと言われるショッピングセンター「ドゥルージバ」も「ラードウガ」も、内部は「ヴォストー

ク」と同様で、かつてのレイナックの露店が整理されテナントとして入った様相である。前述のイルクーツクの中国人レイナックが、閉鎖後も同じ土地に開設された商業モール「シャンハイ・シティ」や郊外に新たに開設されたショッピングセンター「キタイ・ゴード」として「中国的なるもの」を明示する名称が継続的に利用されていることを考えれば、東方を意味する「ヴォストーク」や友好を意味する「ドゥルージバ」もまた、中国や東アジアとの関係を色濃く残す意匠として解釈できる。つまり、中国人レイナックは、行政的には排除の対象とされていたものの、地域の市民にとっては、「中国的なるもの」は排除の対象としては見なされておらず、特定の購買者層にとって不可欠な存在と位置づけられている。

このことは、旧グシノブラーツキー・レイナックがあった地域に開設されたショッピングセンター「ネフスキー」と対比することで、より鮮明となる。「ネフスキー」という名称は、サンクトペテルブルクを流れるネヴァ川に由来する。サンクトペテルブルクは、1703年にピョートル大帝が建設し、以後ロシア帝国の首都であり、ロシアの「ヨーロッパへの窓」[外川 1991]であった。そうした西欧世界に開かれたイメージをもつ名称としての「ネフスキー」は、「ヴォストーク」とは異なる戦略をもつ。「ヴォストーク」や「ドゥルージバ」は、中国製品が主力商品であり、旧グシノブラーツキー・レイナックを受け継ぐ廉価な商品を提供するショッピングセンターとしての位置づけであるが、ショッピングセンター「ネフスキー」に入っている店舗を見渡せば、商品がトルコ製品であることを強調している店舗が多いことに気づく(写真 11)。ノヴォシビルスクには、IKEA や Auchan など欧州に拠点を置く大規模ショッピングセンターもあり、質の高い商品を提供している。そうした質の高い商品の購買層と旧グシノブラーツキー・レイナックに象徴される廉価な中国製品の購買層の間を、この「ネフスキー」は狙っている。



写真 10) ショッピングセンター「ネフスキー」



写真 11) トルコ製品を売る店舗

グシノブラーツキー・ルイナックが、かつて中国人商人が運営するテナントが多く、また、中国製品を中心に販売するルイナックであったことから、事実上の中国人ルイナックであることは確かである。グシノブラーツキー・ルイナックが閉鎖された後も、ショッピングセンター「ヴォストーク」や「ドゥルージバ」などに旧ルイナックの特徴が継承されている。変化したのは、衛生設備などを完備しない無秩序なルイナックから、法令に従って屋根付きの構造物のなかに整然とテナントが並び、テナント管理会社はその管理に責任をもって運営することとなった点である。こうした変化は、中国人商人や中国人商品の地域からの排除によって行われたのではない。新たなショッピングセンターも、イルクー

ツクのルイナックほどに、中国的なる名称を提示しているわけではないが、穏やかに東方世界との関係をショッピングセンターの名称に残すとともに、旧グシノブラーツキー・ルイナックを受け継いでいる点を意識的に提示している所以は、そこにある。一方で、廉価な中国製品が、ノヴォシビルスク市民の特定の購買層の選択肢であるがゆえにショッピングセンターは中国人ルイナックの性質を受け継ぎ、他方で、商品の差別化、購買層の差別化を意識してショッピングセンター「ネフスキー」がトルコ製品を提供するように、もはやグシノブラーツキー・ルイナックがあった地区は、中国人商人による中国人製品の販売のためのルイナックではなく、多様な物流に開かれたルイナックとなっている。

4. ロシア東部の中国人ルイナックの進化

これまで観察してきたロシア東部の中国人ルイナックは、「中国的なるもの」を維持・継承しながらも、それを中国人による中国人製品のためのエスノ・ランドスケープとしてではなく、地域の消費者が購買の選択肢として日常生活のなかで位置づけ、多様な担い手が交差する空間とすることで、多文化的性格をルイナックに与えている。もちろん、ロシア東部のこうしたルイナックが、反移民感情から無縁というわけではない。実際、ノヴォシビルスク市の反移民感情について世論調査を行ったポプコフ [Попков 2015] の調査によれば、ノヴォシビルスク市において民族間の緊張が高まる場所は、ヒーロクスキー・ルイナック近隣地区を挙げた回答者が 49%、グシノブラーツキー・ルイナック周辺地区を挙げた回答者が 48%、レヴォベレジニー・ルイナック周辺地区が 14%、そのような場所はないとの回答が 12% であった。また、グシノブラーツキー・ルイナックに暗躍する移民としてアルメニア人、アゼルバイジャン人、タジク人、ジブシーと並び、最大勢力として中国人が取り上げられることもあった¹²⁾。それでも、本章で観察したように、中国人ルイナックが

12) Континент Сибирь Online: <https://ksonline.ru/nomer/ks/-/id/16468/> (2019年6月20日取得)

地域において特定の購買層にとっての重要な選択肢となり、地域に浸透し、「中国的なるもの」の意味を反移民感情との関わりではなく、東方世界に物流が開かれたルイナックとして独自の進化を遂げてきたことは、ロシア欧州部のルイナックと比較すれば、特異な空間形成のあり方であったと言える。

ロシア欧州部のルイナックのあり方を考えるとき、モスクワ市のチェルキゾフスキー・ルイナックの閉鎖は象徴的事件である。このルイナックは、モスクワ市イズマイロヴォ地区にあり、経営者は少なくとも形式的にはロシア人であるが、中国人移民による商業センターといわれていた。このルイナックが2009年6月29日に閉鎖された。衛生・防災上の違反が直接的な理由ではあるものの、同ルイナックでの密売と不法移民の掃が目的であった。100人規模で中国人やベトナム人が拘留され、本国強制送還となった。中国政府は、翌月すぐにこの閉鎖に伴う中国人ビジネスマンの損害を最小限にするようにモスクワ市政府に申し入れている。このルイナックの閉鎖により2万人の不法移民を含む4万5千人の移民たちが路頭に迷うこととなった。

チェルキゾフスキー・ルイナックの閉鎖は、このルイナックの実質的組織者でありアゼルバイジャン系でアクト・グループ代表であったテルマン・イスラモフが取引先のトルコに豪華ホテルを建設したことを当時のプーチン首相が批判したことを契機とし、経済危機下のもと国民の政府への批判をかわそうという政治的動機が背後にあったとも考えられている¹³⁾。ロシアの社会調査機関のひとつであるレヴァダ・センターが行ったモスクワ市民への当時のアンケート調査では、67%がこのルイナックの閉鎖を支持し、53%が不法移民のせいで、47%が密売問題、41%が衛生管理問題で閉鎖されたと考えている¹⁴⁾。

その後、モスクワ市やサンクトペテルブルク市では、ルイナックは、様々な方法で解体され、縮小されていった。特に、連邦法 No. 271「小

13) RIA Novosti: <https://ria.ru/20090609/173886095.html> (2019年6月7日取得)

14) Poccбaлл: www.rosbalt.ru/2009/07/20/656488.html (2019年6月7日取得)

売市場およびロシア連邦労働法典改正について」(2006年12月30日付)によりレイナックの構造や許認可が厳しく規定され、それに違反するサンクトペテルブルク市とモスクワ市のレイナックは2012年7月1日までにそれらの規定に適合するよう求めるよう求められた。モスクワ市には、2011年には77のレイナックがあったが、2012年には53、2013年には51箇所まで減少した¹⁵⁾。2015年1月までにモスクワ市は市内30箇所のレイナックを閉鎖した。また、2016年2月9日にモスクワ市は市内の不法建築物の解体を行政執行した。そのなかには、多くのレイナックが含まれていた。行政側の見解は、もちろん、移民労働者を排斥することを堂々と主張していたわけではなく、あくまで労働行政に基づく対応であったり、衛生問題への対応であったり、不法建築物への対応であったりする。解体されたレイナックのあとには、近代的なショッピングセンターが新たに建設され、そこでは移民たちが商業の担い手になることはなかった。移民たちが主な商業の担い手であった従来のレイナックは、ロシア欧州部においては、衛生的ではないものとして、また、不法に商業行為を行うものとして、市内から放逐されていった。これは、レイナックという空間から担い手たる移民を排除することに等しい処置であった。

ロシア欧州部においては、こうしたレイナックからの移民の排除が、行政にとって喫緊の課題であったことには、理由がある。レイナックの境界周辺とその内部は、市民と「よそ者」たる移民たちが交流する空間であり、また、多様な民族的背景をもつ人々が互いに交流する場である。それゆえ、同時に衝突をも引き起こす空間である。2010年12月、若者同士の喧嘩で北コーカサス出身者の銃撃によりモスクワのサッカーファンの若者が死亡した。それに抗議し、過激な民族主義者を含む数千人がマネージ広場に集まり、非スラブ系と思われる住民などに無差別に攻撃を加える事態となった。多数の負傷者がでたこの事件は、国内治安問題となった。2013年7月27日、マトヴェエフスキー・

15) Российская газета: <https://rg.ru/2013/08/02/rinki-site.html> (2019年6月4日取得)

ルイナック周辺で発生した事件は、警察官がレイプ容疑でダゲスタン人を拘束しようとしたときに、このダゲスタン人の親族が警察官に暴行を働いたことに端を発している。警察によれば、この事件の取り締まりにおいて、470人の移民たちが拘留された。拘束された移民たちのなかには、多くのベトナム人も含まれていたとされている [Tkach and Brednikova 2016]。数週間の間、モスクワやサンクトペテルブルク市のルイナックを群衆が襲い、警察も荷担し、ルイナックで果物などを売っている移民たちは殴られ、拘束され、商品は壊された。これも、国内治安にとって大きな懸念の対象となった。2013年10月には、モスクワ市南区ブリュリョヴォ地区でも暴動が生じている。25歳ロシア人男性がルイナック近くで中央アジアもしくはコーカサスからの移民とおぼしき者に殺害された。これに抗議する市民が暴動を起こすに至った。この事件は、マスメディアを賑わせ、警察は捜索において大量の移民を拘束した。事件後、すぐに移民たちが多く働くこの地区のルイナックの閉鎖を求める声があがり、翌年1月にはそのルイナックは閉鎖された。ロシア欧州部では、ルイナックという空間が、移民空間として強く意識され、反移民感情を発露させた暴動が起りやすくなっている。頻繁にルイナックの境界周辺で事件が発生し、治安問題となっていることは、ロシア欧州部におけるルイナックのもつエスノ・ランドスケープに対する地域住民の対峙のあり方が、ロシア東部の地域住民の中国人ルイナックに対する対峙のあり方と大きく異なっていることを示唆している。

Molodikova [2010] は、反移民感情の源泉は、地方政府の反移民的姿勢にあり、モスクワ市やモスクワ州、サンクトペテルブルク市、クラスノダール市、スタヴロポリ市などで顕著であり、シベリアの諸都市では比較的移民に寛容であるとしている。本章におけるイルクーツ市とノヴォシビルスク市の事例は、それに対して異なる見方を提示している。ロシア連邦全体でエスニックなルイナックの解体は行政によって共通に勧められているものの、これらシベリアの中国人ルイナック

は、行政的な解体が進む中で、ビジネスにおいても積極的に中国人ルイナックの継承が追求され、地域住民も中国人ルイナックを反移民感情の対象としてではなく、地域住民にとって不可欠なランドスケープとして位置づけている事実こそ、わたしたちは着目すべきである。

ロシア東部地域の中国人ルイナックの中国経済の浸透と中国人ビジネスとの協働は、ロシア欧州部の移民を担い手とするルイナックとは異なる進化と発展を遂げてきた。ロシア東部地域は、いち早く中国に対して適応し、ハイブリッドなシベリア・極東地域の文化様式を形成しつつあるとの見方もある[Бляхер et al. 2013: 210]。かつて支配的だった担ぎ屋貿易ビジネス層は、現在の中小企業の恒常的なビジネスからは隅に押しやられており、現在のロシア国境地域における中国商業ビジネスは非常に組織化されたものになっている。同時に、現地ロシア人にとっての中国人のステレオタイプは、かつてのロシア語を話すことのできない中国からの出稼ぎ労働者ではなく、ロシア語やロシアの文化を理解し、ロシア・ビジネスに適応したビジネス・商人層との遭遇のなかで形成されており[Дятлова 2013: 75-76]、ロシア東部地域の住民たちの中国人への態度をかつてと比べ大きく変化させている。

中露の人的交流は規模の上でも充実し、かつてのように中国人を出稼ぎ労働者や担ぎ屋商人といった同質的な職業階層やルイナック領域に代表される単層的な交流ではなく、日常生活レベルでのコンタクトを頻繁に繰り返し、地域ビジネスを展開し、多様なプレゼンスを示す交流になっている。現地で扱われる商品種類は多様であるが、廉価な商品のイメージが現在もつきまわっているのは確かであるし、また、そのような商品の購買層を積極的につかんでいるからこそ、中国人ルイナックがもつ「中国的なるもの」はロシア東部地域においてルイナックの宣伝材料となったのである。また、廉価商品のなかにも物流ルートによって中国製品の品質にも差別化が生じており、トルコ製品なども加わり、廉価商品も選択肢が多様化している。こうした人的交流および物流のプレゼンスの多様性は、中国や中央アジアに通じる回廊を

もつロシア東部地域という地理的特色を生かした交流および物流の規模に支えられている。ロシア欧州部の移民を担い手としたルイナックのエスノ・ランドスケープとは異なり、ロシア東部地域の中国人ルイナックは、その空間を移民のランドスケープとして忌避の対象とすることなく、地域住民が民族的にも商品の質においても多様性を享受するための独自のランドスケープを形成している。

追記：本章は、JSPS 科研費 JP18K18538 および人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究」の成果でもある。

参考文献

デヤトロフ・ヴィクトル

2010 「シベリア・極東地域におけるステレオタイプと移民恐怖症」堀江典生編著『現代中央アジア・ロシア移民論』285-307、京都：ミネルヴァ書房

外川継男

1991 『ロシアとソ連邦』講談社学術文庫、東京：講談社
堀江典生

2010 「北東アジアのなかの中口経済：反省と展望」大津定美、松野周治、堀江典生編著『中口経済論：国境地域から見る北東アジアの新展開』3-20、京都：ミネルヴァ書房

堀江典生

2015 「ロシア東部地域における中国人市場の進化」平成26年度外務省外交・安全保障調査研究事業『ロシア極東・シベリア地域開発と日本の経済安全保障』121-134、東京：日本国際問題研究所

Бляхер, Л., Т. Журавская, Е. Скрипник, И. Пешков

2013, Дальневосточное трансграничье In В. Дятлов, К. Григоричев ред., Переселенческое общество Азиатской России: миграции, пространства, сообщества, Иркутск: «Отгиск», 36-210

Григоричев, К. и В. Дятлов

2017, «Китайские» рынки России: Роль в постсоциалистической трансформации [случай Иркутска), Вестник Томского государственного университета, 419, 121–132

Дятлов, В.

2005, Миграции, мигранты, «новые диаспоры»: фактор стабильности и конфликта в регионе, В. Дятлов, С. Панарин, М. Рожанский ред., Байкальская Сибирь: из чего складывается стабильность, Иркутск: Ноталис

Дятлов, В. и К. Григоричев

2014, Сибирь: Динамика этнизации годовского пространства переселенческого общества, Известия Иркутского государственного университета. Серия «Политология. Религиоведение», Т. 10. 8-19

Дятлов, В. и Р. Кузнецов

2005, «Шанхай» в центре Иркутска: Экология китайского рынка. In В. Дятлов, С. Панарин, М. Рожанский ред. Байкальская Сибирь: из чего складывается стабильность, Иркутск: Ноталис

Дятлова, Е. В.

2013, Историческая динамика представлений о китайских торговцах, предпринимательстве и деловой культуре в позднимперской и современной России, Иркутск : Изд-во Иркут. гос. ун-та.

Пешкова, В.

2015, Инфраструктура трудовых мигрантов в городах современной России [на примере мигрантов из Узбекистана и Киргизии в Москве), Мир России, 24 [2), 129-151

Попков Ю.

2015, Межнациональные отношения на муниципальном уровне в оценках массового сознания (на примере города Новосибирска), Знание. Понимание. Умение, no. 3, 40-53

Хорие, Н. и Г. Константин

2015, Эволюция китайских рынков в Сибири: пересборка «китайскости» и открытие «закрытых» локальностей. In В. Дятлов, К. Григоричев ред., Этнические рынки в России: пространство торгового и места встречи, Иркутск : Изд-во ИГУ, 141-158

Molodikova, I.

2010, The new Russian migration policy and old phobias towards ethnic migrants. In Jasna Čapo Žmegač, Christian Voß and Klaus Roth eds., *Co-ethnic Migrations Compared: Central and Eastern European Contexts*, München: Verlag Otto Sagner, 231-250

Tkach, O., and O. Brednikova

2016, Labour migration and contradictory logic of integration in Russia. In I. Liikanen, J. Scott, and T. Sotkasiira, eds., *The EU's Eastern Neighbourhood: Migration, borders and regional stability*, New York: Routledge, 201-2017.